



安心とつるおの「下町」の手をめぐりて

# 防災 まちづくり 阪版

発行の寺言問を防災のまちにする会

平成7年4月1日

阪神大震災は、とてもひとつごとと思えません。お亡くなりになった方に対し慎んで哀悼の意を表します。

今号では、彼らの命、そして今もなお不自由な生活を強いられている方たちの苦勞を無駄にしないよう、一寺言問地区に住む私たちの視点で震災を特集します。



朝日新聞より



住民防災組織  
渡辺長太郎さん  
(堤通一丁目)

「このあいだ、向島消防署が町会の役員や町会の会員、それから消防団員に行ったアンケート結果を見せてもらったんだけど、——いつ東京は大地震に襲われるか?という内容の問いに対しては、4割の人が3年のうちにおこるのではないかって答えていましたよ。それから、地震で一番怖いのは火事だという結果も出ていました。」

神戸の様子を見ると、震災時の火災に対しては、自分のまちは自分で守るつもりでないといけないと思いました。うちの町会にも、住民防災組織、"はできていますよ。でも、町会内に消防団に入っているような消火活動に慣れている人はいないから、断水時の火災に備



この度の震災で...  
阿久津久子さん  
(向島五丁目)

「この度の震災で避難生活をしている方たちがお気の毒でなりません。体育館などの避難所では、せめて家族ごとに簡単な間仕切りをつくってあげることほできないのでしょうか。」

子供さんのいるご家族は、周囲への遠慮なども大変でしょうし、お年寄りや女性の方たちにとっては、プライバシーが全く保たれないのは耐えられないことだ



連携  
大場森夫さん  
(東向島三丁目)

「阪神大震災で学んだ教訓を、やがて起こるだろう東京直下型大地震と想定して、東向島三丁目わが町の対策を考えてみると——いちはやく、宮元町会対策本部を百花園に設営して援助体制を整えたいですよ。活動の核となるのは町会の役員が理想的。町のことを知り尽くしたり、ダーの存在がいかに重要か、神戸市の真野地区を見て思います。ことにお年寄りの多い墨田区では、隣近所でささえあって生きぬいていく姿勢、たくましさや、気力が必要になってくるから。」

町会のあるべき姿勢をこのようにみる大場さん。先日開かれた連絡会(まちかどニュース①参照)にふれ、隣の町会や区民消防隊、消防団、消防署、区が確認し合い、より強力な連携体制づくりを約束したことをたいへん評価しています。「自分たちの体制を整えていく上で、区、都、消防、保健所、国などへ質問したいことが山ほどあります。それから、見直しているという防災計画も早くみたいですね。」



提案  
市田貞夫さん  
(向島五丁目)

本所消防団第4分団の団員の市田さん。「阪神大震災では、家が壊れて押しつぶされて死んだ方が多かったですよ。この向島地区では、やはり地震の後の火災が一番怖いのではないのでしょうか。」

テレビ報道では、せっかく消防車が来ても肝心の水が出ないという状況が報じられました。阪神地区では、消火栓や貯水槽の設備が貧弱だったように思います。

一つ提案があるのですが、私たちの地区では隅田川全体をそっくり、貯水槽として利用する方法を考えたらどうでしょう。二百メートルおきくらいに、揚水(水を吸い上げる)ポンプを設置しておけばよいのです。そこから、現在ある貯水槽へ次々とホースをつなげば、かなり広い地域に、水がとどくのではないかと思います。

幸い最近では、かみそり堤防をスーパー堤防化する計画が進められているので、都や国が前向きになれば、これはきっと実現できると思うのです。」

